

梅郷礼拝堂 - 小さな材が集積し大屋根を支える仕組みで寺院再興



【社会背景、きっかけ】

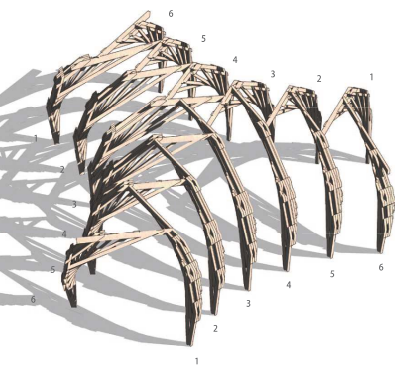
応永2年(1395年)野田市内に創建された歴史ある寺院の末寺で、廃寺となった寺院の再興計画、新たに礼拝堂を建て古い霊園を整備、新住職をおく計画。

【デザインコンセプト】

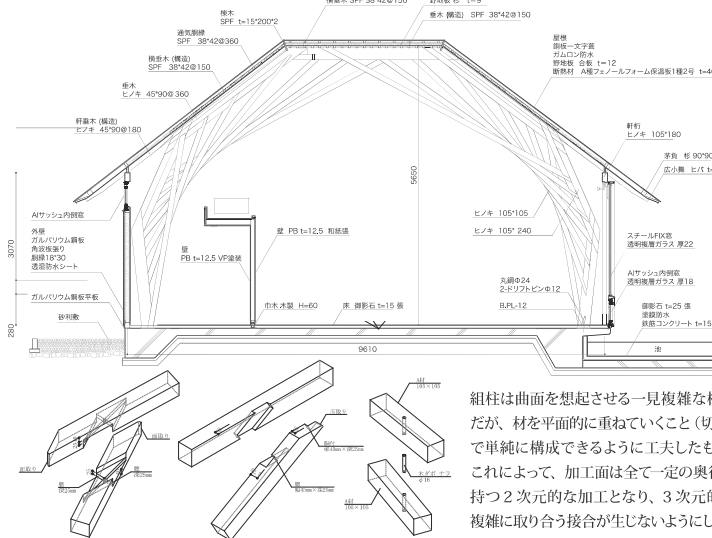
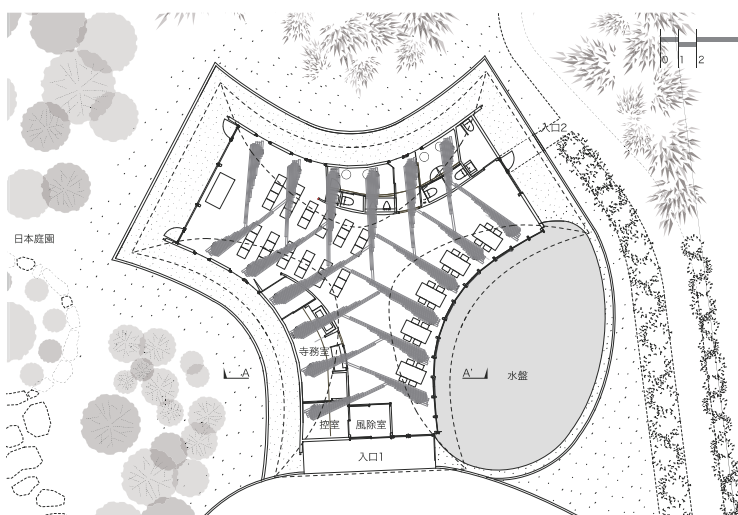
100年単位で使用されていく祈りの場所には、建物の永続性(新しい使い方と性能)が重要であると考えました。

【場所を説明する少し強いかたち】

流動的な空間を、組柱が相持ちで支え合った架構で構成。空間は、身近な材の集積が特徴で、小さな材が助け合う構成は「新しい礼拝堂」を示しています。



- 建物全体は、6種18本の「組柱」が3方向に組み合う「相持ち(レシプロ)」の構成。
- 規格長の一般製材を、玉簾のように組み合わせることができる内部空間は、合理性と装飾性(力の流れの視覚的表現)をあわせもっています。



組柱は曲面を想起させる一見複雑な様相だが、材を平面的に重ねていくこと(切削)で単純に構成できるように工夫したもの。これによって、加工面は全て一定の奥行を持つ2次元的な加工となり、3次元的な複雑に取り合う接合が生じないようにした。



01. 「柔らかな公共性」 3つの方向にひろがる平面形状

一般に建物中央に軸が通る宗教的な空間に対して、場所、環境の要素を加えた3方向に広がる軸をつくり、宗教性を薄めることで、気軽に訪れることができ、多様な活動を誘発する計画としています。



多目的活用事例：JAZZ(上)と展覧会(右)



02. 場所を書き替える

霊園はランドスケープの視点から再整備し、建物とも連携。ともすると無機的、画一的な空間となる墓域を、生垣で囲い視線を制御、緑の潤いと親しみのある個人の単位に相応しい霊園を実現しています。



霊園の俯瞰(上)と盆の行事を行う池(左)



03. 仕組みを視覚化する「玉すだれ木質構造」

100年単位の永続性を支えるための接合方法は、金物などを使用しない木と木を切削し組み合わせ、力をダイレクトに伝達する方式、木材の繊維方向に支圧力を伝え、経年変化によるガタも生じにくく、荷重に対しても変形しにくい接合としています。



仕口(上)と組柱ユニットごとの施工風景(右)

